

2018
2/24(土)
読売
朝刊

食品配達用の箱には、毎回違う食べ物が詰められる(堺市東区で)



食料支援の輪 すくすく

「中学生の息子は食わず嫌いで偏食なのに、『食料支援』で届けられた食品は喜んで食べるんです。ワクワク感があるのかな」

堺市で2人の子どもを育てるシングルマザー(51)は、思わぬプラス効果だと笑った。

おおさが 写真散歩

まだ食べられるのに、賞味期限が近づいたという理由で捨てられる食べ物が、世の中にあふれている。こうした食品を、生活困窮家庭に無償で届ける「食料支援」を展開するのが、認定NPO法人「ふどばんくOSAKA」(堺市東区)だ。

賞味期限が1か月以上あって常温保存ができ、製造者やアレルギーを引越す素材の使用の有無が読み取れるよう表示された食品を、持ち込んでもらう試みだ。一部店舗では最初の月から箱が満杯になったという。大阪府平野区にある、ふどばんくOSAKAの拠点施設では月1回、300人分のパンや野菜、保存食を用意する「おすそわけ食マーケット」と名付けた取り組みも始まっている。活動を広く知ってもらうため、地元の人にも関心を広げた。

2013年4月に活動を始め、16年度には約220の提供元から約158社の加工品や缶詰、米などを受け取った。児童養護施設をはじめ約210の施設や団体に配り、家庭への配達も昨年の夏に始めた。親たちには事前にとのような食料が必要かを聞き、月に2回のペースで、最大3か月支援する。これまで、21世帯に100回ほど届けた。

生活保護を受けながら体に障害がある娘を育てる、同区の主婦(47)は「食品の種類が豊富でありがたい。自分自身、ボランティアとして活動を支援してみたい」という。「まずは食事をきちんととって、仕事や生活の安定につながるステップにしてほしい」。ふどばんくOSAKAの事務局長を務める、田原俊雄さん(38)はそう話した。(尾賀聡)



ボランティアの女性からパンを受け取る親子(手前)。「おすそわけ食マーケット」には地域の人たちも大勢訪れた(大阪市平野区で)



ダイエーの店内に設けられた、食品回収用の箱。1月は2箱ともにほぼ満杯になったという(堺市西区のダイエーおおとり店で)